

Title	『観光紀游』に見る“病”と“治療”
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 18 P.17-P.28
Issue Date	2009-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/77821">http://hdl.handle.net/11094/77821</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『観光紀游』に見る“病”と“治療”\*

福井 智子\*\*

キーワード：岡千仞 『観光紀游』 薬石の語

《观光纪游》是日本明治时代的汉学家冈千仞（1833-1914），字天爵，又字振衣，号鹿门，去中国旅游时所做的记录。明治17年5月末，千仞由横滨抵达上海，以上海为据点，游历了苏州、杭州、天津、北京、广东、香港等地，对中国进行了为期大约十一个月多的考察。途中不仅游览了中国各地的风光，考察了社会民俗风情，还拜访了李鸿章、盛宣怀、俞樾、李慈铭、王韬等许多清朝的高官和著名学者，并和他们自文学、历史，艺术到中国社会存在的各种弊端进行了讨论。《观光纪游》文中对清末中国社会情况的详细观察和批评，对了解当时日本人的中国观，提供了珍贵的资料。该书与竹添井井的《栈云峡雨日记》被称为明治初期的汉文中国游记双璧。

在《观光纪游》的《例言》中，冈千仞对自己的写作意图作了如下说明：“是书间记中土失政弊俗。人或议其过甚。顾余异域人，直记所耳目，非有意为诽谤。他日流入中土，安知不有心者或取为药石之语乎”。虽然旅游途中遇到的一些中国文人对《观光纪游》的内容给与了善意的评价，但千仞还是预测到了自己对中国社会的激烈批评会引起中方的很大反感，而感不安。虽知会遭许多中国人反感，却真心希望中国社会能醒悟到《观光纪游》上提出的社会问题，能成为所谓“药”或者“治疗”的“药石之语”。后来，宋恕、蔡元培、鲁迅和周作人等对《观光纪游》给与了很高的评价，因此该书可以说在推进中国社会改革运动上起到了一些“疗效”。

《观光纪游》中用了不少医疗术语，把中国的社会问题比喻为“疾病”，而对那些“疾病”呼吁必须给与紧急的“治疗”。把当时中国的社会问题譬喻患“疾病”的，不只冈千仞一人，但对患“疾病”的中国呼吁急须“治疗”并做各方面的努力的，只有冈千仞一人。事实上如前面所说，《观光纪游》对中国社会起到的“药石之语”的作用是得到了后世的肯定。

本稿通过《观光纪游》中有关千仞提出的清末社会的“中国病”和对于这些问题千仞想出的“治疗”对策，探讨当时冈千仞对中国社会改革所做的各种尝试。以及通过千仞在旅游途中因得病而经历的东洋、西洋两方面的治疗记录，介绍当时中国的中、日、欧三方面的医疗情况。

\* 试论《观光纪游》中之“疾病”与“治疗”（福井智子 FUKUI Tomoko）

\*\* 大阪大学非常勤講師

## 1 はじめに

『観光紀游』は、明治初期の漢学者・岡千仞（1833-1914）による中国旅行記である。元仙台藩士で、維新後は私塾の経営と著作に専念した千仞の旅は、明治17年（1884）5月末、横浜港から三菱汽船東京丸で上海へ向かうところから始まった。上海到着後はそこを起点に、蘇州、杭州、天津、北京、広東、香港へと足を伸ばす。そして翌年4月中旬の帰国で終了した。およそ一年に亘る旅の中、千仞は李鴻章、盛宣懷をはじめとする清朝の高官たち、及び俞樾、李慈銘ら著名な学者らと面会し、文学、学術から社会情勢まで幅広く議論を交えた。随所に見られる千仞の中国社会に対する鋭い観察眼は、他の旅行記を凌駕する本書の特徴と言える。そして今日、竹添井井の『棧雲峽雨日記』と共に、明治初期を代表する漢文旅行記に数えられている。

さて『観光紀游』「例言」には、次のような記述がある。「是の書は<sup>中土</sup>（中国）の失政弊俗を記し、人或いは其の過ぎたること甚だしきを議す。顧みるに余は異域の人なり。直に耳目せし所を記し、誹謗を為すの意有るに非ず。他日流れて中土に入れば、安くんぞ心有る者、或いは取りて藥石の語と為さざるを知らんや」<sup>1)</sup>。千仞は『観光紀游』を刊行するにあたり、旅先で出会った幾人かの中国知識人から好意的評価を得てはいたものの、中国に対するあまりにも厳しい批判が、多くの反発を招くことを予想した。しかし同時に本書が取り上げた中国社会の停滞ぶり、腐敗の数々、そしてこれらに対する自身の批判が、むしろ変革への「藥石の語」、つまり薬、或いは治療となることを期待した。事実『観光紀游』は後に宋恕、蔡元培、魯迅と周作人の兄弟らから高い評価を得たことから、中国社会の改革を推し進める動きに対し、一定の“効果”をもたらしたと推測される<sup>2)</sup>。

さて本書には、中国の社会問題を“病”と捉え、その“治療”解決策を提起し続ける千仞の奮闘ぶりに止まらず、千仞自身が旅行中に受けた東洋、西洋の両医療体験など、様々な“病”と“治療”に関する記述が見られる。そこで本稿では、『観光紀游』から千仞が中国で見聞、体験した社会と身体における“病”と“治療”に対し、以下の二点を考察する。まずは千仞が問題視した中国社会の現状、そしてその改革への提言である。それから当時の中国における医療状況に対する記述を取り上げ、歴史資料として提示すると共に、そこから窺われる千仞の中国認識を検討する。これらの作業を通じ、本書が備え持った「藥石の語」としての性質を明らかにしたいと思う。

<sup>1)</sup> 引用は『観光紀游』（沈雲龍主編『近代中国資料叢刊』）により、漢文訓読は筆者による。

<sup>2)</sup> 張明傑「明治前記の中国遊記—岡千仞の『観光紀游』について」、(『Journal of Hospitality and Tourism』2005)、pp.37-40 参照。

## 2 中国社会の“病”とその“治療”

上海到着後の千仞は、日本から同船した中国商人の王仁乾〔字は惕齋〕の招きを受け、慈溪の名門として知られる王の実家を訪れる。裕福で知識人も輩出する王氏一族から、千仞は手厚いもてなしで迎えられた。しかし千仞はその豊かな生活の背後に、「中土の病源」を見いだすのであった。「已に衣食の憂い無く、偃然（安らかにくつろぐ）自足、漸く驕奢（おごり高ぶる）に流る。而して子弟の読書を知り才氣有るは、専ら精神を八股の学（科挙試験の勉強）に耗やす。其の累試第せざるに及び、不平を酒色に漏らし、頽然自放、心を世事に役さず。…或いは洋煙（アヘン）に溺れ、資産を蕩じ、子女を売り、性命を縮めるに至るも、自悔せず。余は此に来て累月、中土の病源を得、此に付記す」（7月20日）。「余私かに謂らく、煙毒と六経の毒を一洗するに非ざれば、中土の事、手を下すべからず」（8月1日）ともあるように、千仞はアヘンの流行と科挙、及び六経への拘泥に、中国社会を蝕む“病”を見て取ったのである。

まずアヘンの蔓延であるが、中国茶の莫大な輸入超過に対し、イギリスがその対価として、有害と知りつつインド産のアヘンを中国へ密輸したことに始まる。銀の流出とアヘンの健康被害を危惧した清国はたびたび取締りを実施したものの、広東地域の経済的利益との結びつきもあって、有効な成果を挙げられなかった。後にアヘン戦争が勃発し、敗北、不平等条約締結へと至るが、アヘン密輸問題は曖昧なまま置き去りにされた。千仞が蘇杭の旅だけでも、「隣舟に貴官有り。毒煙を吸う。妖臭紛然として、終夜絶たず」（7月1日）、「帰途月に乗じて市街を徘徊す。煙店を過る毎に、臭氣鼻を衝く。曰く、杭一城で煙を業するもの、千余戸を下らず」（7月9日）など、アヘンが広く行われている場を度々目にするのはその為である。しかし千仞にアヘン蔓延への危機感を最も高めさせたのは、知識人までもがアヘンに冒されている事態であった。とりわけ友人の王韜（1828-97）との再会は、王のアヘン中毒によって、その友情と敬意の念を甚だそぐわれる結果となる。

王韜は字を紫詮といい、天南遁叟・駁園老民・湘北逸民などの号を持った。17歳で科挙の“秀才”（合格者）となるが、貧しい家庭環境の為に学問を断念し、上海に出て文筆活動で生計を立てた。『普仏戦記』などの著作から欧米事情、世界の大勢に通じる人物として、中国の新興知識人の中でも最も知られていた<sup>3)</sup>。明治12年（1879）に来日した時には、多くの日本人漢学者から盛大な歓迎を受けた。千仞と王韜の交遊もこの時に始まる。王韜の『扶桑遊記』には、「鹿門、性は豪爽高亢、友朋の文字を以て性命と為す。…日国の人材、東京に聚す。見るところ不凡の士多し。而して鹿門は尤も其の

<sup>3)</sup> 王韜の経歴、千仞との交遊については、主として王暁秋「王韜の日本旅行－中日学者の交流と友情」、『中日文化交流史話』、(日本エディタースクール出版部 2000)、前掲、張論文を参照する。

矯矯（抜きん出ている）たる者なり」（5月21日）<sup>4)</sup>とあり、王韜が千仞と親しく交わり、また千仞を高く評価した様子が窺われる。さて香港在住の王韜が上海に移ったと聞き、旅の行程まで変更した千仞のもとに、王韜が「数頭痛を説き、坐するに勝えざる者の如し。恐らく癩毒（アヘン中毒）なり」（6月8日）との情報が伝わった。実際、再会した王韜はアヘンに冒され、しかも千仞の自説、つまり「煙毒と六経の毒とを一掃し、中土の元気を振り起すを説と為す」に対し、「更に一毒有り。貪毒（賄賂）を併せて三毒と為す」（8月25日）と言つてのけ、また「其の煙毒に於いて死するは、何ぞ酒色に於いて死すると異ならん」とも述べ、千仞に「此の言戯れと雖も一理有り」（12月23日）とまで思わせる有様であった。

また慈溪で出会った王仁厚〔字は硯雲〕は科挙合格者であったが、宴会後にアヘンを喫煙する習慣を批判した千仞に対し、「洋煙は中土に行われ、一般に俗と為る。聖人再生すると雖も、復た救うべからず」と述べ、一向に非を認めようとしなかった（7月24日）。

知識人らの間での「洋煙の盛行」の一因には、「或いは憤世の士の、煙を借りて一切の無聊を排するに由る」（6月9日）との見解があるように、当時の中国社会が抱えていた各種の問題に対する、そのやりどころのない憤りと不安があった。西欧列強のアジア進出により、経済的にも軍事的にも立ち遅れた中国が常に劣勢に立たされていた状況からも、知識人らの胸の内は容易に推し量れる。千仞の旅行中にも清仏戦争が勃発し、フランス軍の圧倒的な戦闘力の前に、南洋水師は壊滅し、福州船政局、及び馬尾砲台も破壊される事態が起っていた。国内外の苦境に立たされた中国で、その社会の変革を担うべき知識人たちの多くがアヘンに溺れる状況は、まさに千仞にとって「中土の病源」でしかなかった。

またアヘンとともに、もう一つの「中土の病源」として千仞が数えたものに、科挙、六経への拘泥が挙げられる。各地で千仞は知識人を訪問し、社会情勢について議論を戦わせたが、その時「語りて外事に及べば、茫たること霧中の如し」（9月12日）と、多くは時代錯誤な主戦論や防衛策を展開したり、機器類の新技術を頑なに拒否するなど、あまりにも世界の大勢に暗かった。芝罘道台（地方長官）の方汝翼などは、その面会時に千仞が清仏戦争に対する打開策を求め、「法虜（フランス軍）の猖獗（荒れ狂う）を、小人は中人の為に寒心す。知らず此の事の何れか帰着する所ぞ」と言うと、沈黙の後、公務を理由にその場を去ってしまう。「要是事体（事の本質）を解せざる者なり」と、千仞は呆れざるを得なかった（10月2日）。「中人の病は外情を得ざるに在り」（8月16日）、「抑中土の大病は、上に在る大臣の、域外の大勢に矚く、中土が礼楽文物の大邦

<sup>4)</sup>『扶桑遊記』（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』）。訓読は筆者による。

たるを知るも、域外の礼楽文物の大邦の、中土の如く、隣並相望むを知らざるに在り」(9月21日)と、千仞はこういった知識人、政治家らの世界情勢に対する認識不足、或いは無知を“病”と称した。そしてこれには、科挙、六経への拘泥が影響していると考えた。同様の見解は、中国知識人の中にも見られた。例えば天津道台であった盛宣懷は、「僕は精神を科挙無用の学つひに耗やし、後に電線を開設する雑事に管し、外事を講究する暇あらず」と自ら認め(10月10日)、また蓮池書院の齊令辰は、書院生らに向かって「科挙を指斥して、天下を誤つる本と為」す(11月17日)千仞に共感し、自分は天文学、数学といった西欧の学問の必要を感じていたものの、結局科挙の為にそれらを究めることができなかつたと千仞に打ち明けていた(11月18日)。千仞は決して、科挙を全面否定はしていない。例えば、北京で出会った翰林院の学士たちが詩作する姿に、「腹中万卷、筆に任して直書する」、「要は才無き者の為す所に非らず也」(11月4日)とその才覚に感心し、また天津で後の第三代駐日清国公使、徐承祖と出会い、徐が六経の学が欧米の学と通じるにも関わらず、中国の学者たちは時勢に対応しようとならないのが悩ましいと述べたことに、千仞は大いに納得、且つ感服した(11月23日)。要は科挙合格の為に六経に没頭する知識人たちの学問姿勢が、その国際事情への理解を妨げたことに問題があった。科挙は中国知識人社会を支える一大システムである。だからこそ千仞は、その弊害をより一層根源的、且つ深刻な事態と捉えたのである。

このように“病んだ”中国社会に対し、千仞は事あるごとに“病源”の排除、つまり“治療”の必要を訴えた。王韜には肩すかしを食らったものの、その唯一の“治療”は終始一貫して、アヘンの禁止と科挙の撤廃であった。当時、中国社会を“病人”に見立てた日本人は、竹添井井をはじめ他にも何人かいた<sup>5)</sup>。しかし西欧の学問、教育、産業など、その諸制度の導入という具体策を念頭に、“治療”の必要まで訴えたのは千仞ぐらいであろう。そして明治維新の成功に一定の自信を持った千仞が、日本と比較にならないほど巨大な“病人”中国に求めたものは、徹底した“体質改善”であった。「(沈子封に対し)余は自強自治を以て説と為し、且つ曰く、『我が邦は小国にして、固より以て中土に例うべからず。唯だ今日の小康を享くるは、実は大いに欧学を開き、事に大小と無く、彼の制を斟酌しんしやくし、以て千年の陋弊ろうへいを一洗するに由る也。顧みるに中土は二百年の太平を承け、弊竇へいとう百出(弊害が大量に出る)、弊邦の幕府末世と一般たり。譬うれば猶とくしつお篤疾の人のごとく、温補おんぽく寛劑かんざいの能く治す所に非ず。断然大承氣湯だんじやうきとうの症也』と。「温補」と「大承氣湯」は、ともに漢方の用語である。前者は温め補う治療法を指し、血色が悪く、身体の衰弱、また食欲不振、そして下痢といった症状に対し、「温補劑」として人参湯や

<sup>5)</sup> 巖紹鑾 「竹添光鴻的中国之行与其“中国観”的矛盾」、『日本中国学史』、(江西人民出版社 1991)、pp.282-283,285-286 参照。

四逆湯などが用いられる。後者は便秘、肥満症、高血圧症、精神病、食傷などの症状における処方である。「中土の澆季（おとろえた世）、煙毒と六経の毒を一掃するに非ざれば、則ち固有の元氣、得てして振り起すべからざる」（10月29日）とも言うように、千仞はアヘンの禁止と科挙の撤廃を行わない限り、中国社会に健康な身体に備わる「元氣」を蘇らせることは不可能と確信していた。つまり「煙毒」と「六経の毒」を内に抱える中国社会は、一般に虚弱体質に対して行う「温補」治療などではなく、比較的強く、便秘や肥満に効くとされる「大承氣湯」を用い、その体内にため込んだ不要物である「煙毒」、「六経の毒」を排出すべきと、千仞は漢方医学の知識でもって訴えかけたのである。中国知識人には医学に通じる人物が多く、沈子封にも「反復論難するも、大いに余の説を悦ぶ」と大いに受けた（11月22日）。

また清仏戦争で苦境に立たされる中国に背を向け、日本がフランスに協力的であると批判した学士の朱廣陞〔字は次舟〕の手紙に対し、千仞はそれが邪推であると述べ、且つ“治療”が手遅れにならないようにと、以下のように力説した。「中土の士人は、域外の大勢に矚く」、見識が狭く猜疑心も強い。もし中国が断固としてアヘンを禁止し、ウラジオストック港の防衛をロシアの侵略に先んじて行っていれば、今のような状態に陥ることはなかった。「中土の方今の急務は、大いに欧米に仿い、富強の術を謀り、海外の万国が得てして軼すべからざるの大基本を建つるに在り」と西欧から学ぶ必要を説く。そしてすでに相当疲弊している中国社会ではあったが、まだ遅くはない。「『七年の病』に『三年の艾』、『苟しくも蓄えざらしめば、終身得ざらん』。余の特に惜しむは中土に為すべきの勢い有りて、為さず。而して父母の邦の為に此等の無稽の言（根拠のない発言）を辨ずるに違あらざる也」（明治18年1月27日）と。「七年の病」以下は『孟子』「離婁上」の故事で、時期を逸してはならない、今からでも蓄えようとしなければ、一生かかっても灸に用いる「艾」は得られず、「七年の病」は治らないという意味である。長患い（「七年の病」）している中国社会に対し、欧化政策（「艾」）をはじめ、社会改革の実施をたたみ掛けたのであった。

千仞のこうした“治療”提言は、各地を巡る中、張煥綸〔字は経甫〕ら上海の新興知識人、盛宣懷、朱舜水の子孫で李鴻章のもと日本関係の実務を担当していた朱湛然〔字は舜江〕、そして清朝の最高実力者、李鴻章にも伝えられ、相当な理解と賛同を得た。しかし「我が邦の攘夷論の盛興なるも、亦た猶お貴国の廿年前のごとし、老夫の意に以為らく五年を経るに非ざれば、則ち為す有るべからず」（11月26日）と李鴻章は述べ、結局急速な現状変革は不可能とされる。提言が拒否されたことは、千仞を大いに失望させた。

旅の終盤、過食と南中国の慣れない気候から、千仞は病床にあった。その時、台湾を

めぐって争うフランスと中国の戦鬪を記した書を読む。そこには軍備において圧倒的に優勢であったフランス軍に、敗戦の度に兵士を募って激しく抵抗する中国軍の様子が、「譬うるに猶お痿痺（手足がしびれる病気。転じて政治がゆるんでふるわないたとえ。）せし病夫の、鍼灸を以て活発元気を衝動せしむるがごとし」と綴られていた（3月11日）。こういった記述に目を止める千仞には、旧態然とし、様々な面で統制もきかなくなっていた中国社会の変革には、「(方今の) 絶対の急務は、国是を一変し、科挙を廃止し、文武の制度を改革し、千年の陋習を洗刷し、天下の元気を振り起すに在り」（12月12日）のように、科挙の廃止、早急な欧化政策の導入、そして社会制度の再編成といった自説の“荒療治”こそ、やはり有効だとする確信があったように思われる。

### 3 『観光紀游』に記された中国の医療状況

千仞は旅の途中、上海で「楊齋導きて葉氏の薬肆に過る」（6月18日）、「蔡同徳の薬舗に過り、楊齋を促し同発す」（6月21日）や、蘇州で「午後楊齋に従いて蔡氏の薬舗に過る。宏厦深沈、此の間の猗頓（大富豪）たり」（6月25日）など、しばしば漢方薬店を訪れる。また杭州では「薬舗の豪戸」鄭海曙を訪ね、日中の薬剤について語り合うこともあった（7月9、10日）。蘇杭の旅の通訳兼案内人を買って出た王仁乾は、漢方薬の販売にも携わったはずである。また日本からの同行者であった楊守敬〔字は惺悟〕は、日本の漢方文献考証学を高く評価し、中国で散逸した漢籍で日本に残っていた物を多く持ち帰ったことで知られた<sup>6)</sup>。商業、及び学問上で日中双方の医学界に関係のあった人物との旅が、千仞の訪問先にも影響を与えたと思われる。これ以外にも、「邑医の沈瘦生〔攀梅〕を訪う」（7月14日）、「(姚文樞の) 其の叔の則夫及び毛南坪〔文彬〕、徐古春〔圓成〕に見う。古春は老医なり。好んで文士と交わる」（9月16日）など、中国人医師との交流もあった。

さて上述した薬剤、薬屋、及び医師らは皆、中国の伝統医学、つまり漢方医学に関わる事例である。一方、千仞が旅行中に直接西洋医学と触れたのは、森鷗外や広瀬武夫の日記<sup>7)</sup>にも記されたイギリス海軍の病院を見た時（1月12日）と、病気治療で訪れた2度の香港滞滞時に限られた。実際当時の中国では、アヘン戦争の後、西欧文化が堰を切ったように流入する中、その医学は全土に急速に普及し、各地に西洋医学の病院、診療所、医学学校等も設立されていた。こういった状況が漢方医学界に波紋を投げかけたのは当然で、一部の開明的な医師達には、漢方医学の存続と発展を思い、自らに足りない部分

<sup>6)</sup> 小曾戸正洋『漢方の歴史』、(大修館書店 1999)、pp.170-173 参照。

<sup>7)</sup> 森鷗外『航西日記』（明治17年9月3日）、広瀬武夫『航南私記』（明治25年4月1日）。



を西洋医学から補い、相互交流の可能性を模索する姿も見られた<sup>8)</sup>。しかし『観光紀遊』中の以下の二つのエピソードは、異なる反応を伝えている。まず先にも挙げた慈溪の王氏の一人、王硯雲の酒宴で、馮一梅〔字は夢香〕が日本の漢方医、多紀氏の医学書を盛んに褒めた。そんな夢香に千仞は言った、西洋医学が行われるようになった日本では、もはや多紀氏の本など「芻狗」(用が終われば捨てられるもの)であって、今更手取る者などいない、原版は上海の書店に売ってしまったと。これに対して夢香が、いずれ日本人は必ず後悔すると切り返すと、日本では医術のレベルは相当高まり、西洋医学の訳書も次々出されている、十年後には中国人が争ってこの訳書を買うであろうと千仞は言い、夢香を黙らせてしまう(7月23日)。日本では明治以降、西洋化・富国強兵を目指す新政府の政策により、医師資格に関する規則が整備され、漢方医は後継者を失う危機に直面した。そして明治16年(1883)の医師免許規則の公布以降、その衰退は決定的なものとなっていた<sup>9)</sup>。後に魯迅は「皇漢医学」という一文に、上記のエピソードを引用した。国民党が四・一二反革命クーデター(1927)後に南京に建てた反動政権を諷刺した魯迅は、「これは『四千余年の古国古し』の人民が『腐銅爛鉄を買いこむ』癖である。だから文人は『さかんに多紀氏をほめ』、武人は大いに旧式の大砲や廢銃を買って、外国の『役にたたぬ使いふるしの芻狗』に、賄賂を提供してるのだ」と述べたのである。千仞の夢香へ抱いた批判が、ほぼそのまま魯迅によって繰り返されたと言える。次は香港で出会った北村虎吉による話である。北村はこの地で薬剤の転売をする薬屋であった。北村によると、人參、樟腦、牡丹などのいくつかの薬剤について中国人は日本産を珍重する、「洋剤は固より漢薬に勝りたるも、唯だ千年の慣習、俄かに変う能わず」、この四、五年來は漢方薬の値が上昇し、春先の麻疹の流行も手伝って儲けが三倍にも増えたのだと(3月26日)。これらのエピソードが伝えるものは、中国社会における漢方医学への根強い支持と、西洋医学に対する不信感であり<sup>10)</sup>、千仞の眼はそういった社会の在り方に閉鎖性、旧体質を見ていたと言える。

先に述べたように千仞は旅の終盤で病となり、広東と香港で医者の治療を受けた。まず広東滞在時に連日発熱し、寒気が止まらなかった。そこで「幾那塩」を服用するが、やはり寒気は一晩中治まらなかった(1月28日)。「幾那」とは「規那」とも書き、南米アンデス山中を原産とするアカキナノキの樹皮「キナ皮」を指す。抗マラリア剤として、明治以降日本でもよく用いられた<sup>11)</sup>。数日後、医学に詳しい学士の李文田〔字は

<sup>8)</sup> 傳維康『中国医学の歴史』、(東洋学術出版社 1997)、p606、616 参照。

<sup>9)</sup> 前掲、小曾戸、pp.176-177、陳捷『明治前期日中学術交流の研究』、(汲古書院 2003)、pp. 119-120 参照。

<sup>10)</sup> 駐日清国公使館のスタッフたちも、病気の際には日本の漢方医に治療を依頼することが多かったという。前掲、陳、pp.120-121 参照。

<sup>11)</sup> 「規那」については、「くすりの道修町資料館」(道修町資料保存会)の館長、宮本義夫氏からご教示いただいた。

若農]が千仞の異状に気付き、漢方薬を指示し服用を勧めた(1月31日)。千仞は言われた通りに薬を飲むがやはり回復せず、結局医者には掛かることとなる。この時、知人らに紹介されたのが、「国手」名医と称されていた漢方医の姚蕉石であった。蕉石は千仞の病を「腸胃滞食し、客邪の乗ずる所となる」、つまり過食と旅の疲れと判断し、銀翹散ぎんぎょうさんを用いて治すと伝えた。蕉石の診察を受けた千仞は、「我が邦の漢医と異なること無し。唯だ診察するに胸腹おを按さえず。薬を用いること多量、及び薬種精良なるは、異と為す」と日中の漢方医を比較した(2月2日)。ここで千仞が言う「胸腹を按」さえる診察法とは、患者の腹に直接接触れる「腹診」である。これは日本独自のもので、中国にはなかった。後にその効用が評価されて中国に伝えられたが、これには王仁乾も協力したという<sup>12)</sup>。一方、漢方薬の銀翹散であるが、一般的には風邪の薬として用いられる。千仞はこの事に言及していないが、蕉石の治療への不信につながったかもしれない。実際、千仞の病状は回復せず、むしろ悪化したからである。

「庸医ようい(腕のよくない医者)浅術、性命せいめいを托すべからず」(2月6日)と早々に漢方医の治療に見切りをつけた千仞は、香港で西洋医に掛かることを決意した。蕉石の治療に不信感を抱いた様子が随所に見られる。例えば、重い病状であるにも関わらず軽い薬しか用いない事に、五十歳以上の人に劇薬を軽々しく投与できないと蕉石は説明したが、これには「蓋し治を施すの誤りを悔う也」(2月8日)と治療ミスを感じた。また蕉石の経歴をはじめ、中国の漢方医の技術力やその地位の低さについて、以下のように批判した。蕉石はもともと広東へ役人としてやって来たが、意を得ることが出来ず、仕方なく医者として生計を立てているにすぎない。一般に多くの中国知識人は医学知識を身につけているのだが、実際「刀圭とうけい」医術でもって生活するのは、科挙試験に失敗し、職探しに喘いだ者達である。我が国の医者とは同列に語れない。また中国では今なお「軒岐けんき」伝統医学である漢方に固執し、激しく西洋医学を排斥している。医学に通じた李若農などは、「若し欧医に託して治さば、万に生理無し」と戒めるほどである。30年前の日本とまさに同じ状況であると(2月10日)。蕉石の医術水準の低さ、李学士の西洋医学への拒否反応、それらを取り巻く中国医学界の閉鎖性と停滞に対し、千仞は自らが「中土の病源」に数える科挙の悪影響を指摘した。中国社会とともに自身の健康をも蝕んだ科挙に、千仞の憤りは激しさを増した。

相当ひどい体調で香港へ移動した千仞は、イギリス人の医者「哈亜底東」の治療を受ける。哈亜は「脈を診、胸腹を擦り、熱度を測る。玻瓶に溺水を盛り、熱視し、曰く『佳からず』と。薬を投じて分析して曰く『猶お治るべし。此れ過食の腸胃を傷め、邪氣の乗ずる所と為るに因る也。病発せし日に、良治を施さば、必ずしも此に至らず。宜しく

<sup>12)</sup> 前掲、陳、p.123 参照。

静臥して薬を服すべし』と診断し、主たる病因はやはり過食とした。初期治療が不適切であったとの指摘は、千仞の蕉石への不信を確たるものとしたであろう（2月13日）。これ以後、哈亜が指示する療養食と薬をとりながら静養に徹した千仞は、徐々に回復の兆しを見せる。かなり体調の良くなった時には、哈亜からの勧めで、甥の濯に支えながら香港散策もした。しかし香港の寒暖の差の激しい気候に病は再発、結局完治することを断念せざるを得なかった。哈亜の意見に従い、千仞は船旅に耐えられる体調に回復した時点で帰国し、静養することを決心する（3月21日）。こうして千仞の旅は終わりを迎えた。

さて哈亜の治療に対し、千仞はかなり満足していた様子で、批判は見られない。哈亜は診察の丁寧さは言うまでもなく、症状によって食事の内容を細かく変え、心身ともに疲れ切った千仞を励まし、診察料についても千仞が「寒素（質素なさま）儒生」であった為に「例外に之に待」すと、良心的に応じてくれた（4月5日）。また千仞が帰国時に乗る船に哈亜はやって来、艦医に千仞の病状や治療について申し伝えるなど、最後までその治療は行き届いていた（4月10日）。

医学に門外漢であった千仞だが、若き日に西日本への旅“西遊”に出た時、大阪で緒方洪庵の適塾を訪れ、その評判通りの塾の盛況ぶりを「門前市をなす」と書き留め、また洪庵が訳したフーフランドの内科書『扶氏経験遺訓』の漢訳に取り組むことがあった<sup>13)</sup>。千仞の哈亜の治療、つまり西洋医学に対する信頼、及び好感には、これらの経験も影響したと思われる。

「中土の病源」と称するアヘンの蔓延は、そもそもイギリスによって引き起こされた。そのイギリスの医者に、千仞は自身の健康を托し、ある程度回復に導かれたことに満足を示した。「自強自治」を主張する千仞には、自国の敵でもその長所は評価し、且つ学ぶ必要があった。アヘンは日本同様、清国が貿易、及び喫煙を禁ずべきとし、輸出国側の責任はあまり問題視しなかった。明治維新で“負け組”にあったものの、その成果に誇りを持った千仞の割り切った姿勢がここにも窺われる。

#### 4 「薬石の語」としての『観光紀游』

漢方医学の古典『傷寒論』と『金匱要略』の著者、張仲景（? 150～219）は、高い医術と清廉潔白な人柄から「医聖」と称せられた人物である。中国の正史にその伝記は記載されていないものの、後世の人々の張仲景に対する尊敬は、様々な伝説を生み出した。その中には、以下のようなものがある。皇帝が激しい悪寒を訴える急性疾患にかかり、ときの最高医官もそれを治療できなかった。その時、都に呼ばれた仲景がみごとに

<sup>13)</sup> 梅溪昇「漢学書生岡千仞の適塾訪問」（『洪庵・適塾の研究』、（思文閣出版 1993）、pp.365-370 参照。

皇帝の治療を果たした。仲景の医術にすっかり敬服した皇帝は都に留まるよう説得したが、その政治の腐敗ぶりを見取った仲景は、皇帝の病は治せるが国家の病は治せないと言い、立ち去ったと<sup>14)</sup>。

巖紹壘氏は、“煙毒”、“経毒”といった岡千仞が『観光紀游』中で指摘した社会問題に役人の不正行為を指す“貪毒”を加え、19世紀末の“中国病”と述べた<sup>15)</sup>。この“中国病”に対し、千仞は“治療”の必要を繰り返し述べ、奔走したわけである。しかし結果は張仲景同様、一介の儒生たる千仞には“治療”はもちろんのこと、その実行へと導くことは不可能で、更に自身が病に陥り、旅の予定を繰り返して帰国せざるを得なかった。自宅に戻った千仞は、旅を振り返り、『観光紀游』を次のように締めくくった。「是の游は呉江を遡り、江浙の諸勝を覽、燕京より居庸関、八達嶺を究め、香港より広東に入る。日を為すこと三百五十日、経る所は殆ど八、九千里。以て少しく蓬桑の夙志（年来の望み）を報ずるに足る。唯だ嶺南の癘毒れいどくに触れ、一病奄奄えんえん（生氣のないさま）とし、僅かに一死を免る。豈に名山靈有りて、余が妄りに三寸不律さんすんふりつ（筆、筆記用具）を弄して、中土千年の靈秘りうせつを漏泄するを悦ばざるか」（4月18日）。自身が受けた医療体験からの観察も含め、“中土千年の靈秘”、つまり中国社会の“病”を列挙し、そして批判した千仞は、旅行中には成し遂げられなかったものの、最後までその“治療”をあきらめなかったと言える。『観光紀游』が「薬石の語」として、後世に一定の影響を持ったのは、千仞の中国社会に变革を呼びかける、この不屈の精神によるのである。

## 主要参考文献

- 宇野量介『鹿門岡千仞の生涯』、（発行者・岡広 1975）  
 王曉秋『中日文化交流史話』、（日本エディタースクール出版 2000）  
 梶田昭『医学の歴史』、（講談社 2003）  
 巖紹壘『日本中国学史』、（江西人民出版社 1991）  
 小曾戸洋『漢方の歴史』、（大修館書店 1999）  
 張明傑「明治前記の中国遊記—岡千仞の『観光紀游』について」、『Journal of Hospitality and Tourism』 Vol.1、（2005）  
 陳捷『明治前期日中学術交流の研究』、（汲古書院 2003）  
 傅維康『中国医学の歴史』、（東洋学術出版社 1997）  
 町田三郎『明治の漢学者たち』、（研文出版 1998）  
 真柳誠「魯迅のエッセイ『皇漢医学』について」(<http://www.hum.ibaraki.ac.jp/>)

<sup>14)</sup> 前掲、小曾戸、pp.64-66 参照。

<sup>15)</sup> 前掲、巖、「岡千仞的中国之行与其中国觀的分裂」、p.292 参照。

[mayanagi/paper02/ishi03.html](http://www.hum.ibaraki.ac.jp/mayanagi/paper02/ishi03.html))

茂木敏夫『変容する東アジアの国際秩序』、(山川出版社 1997)

梁永宣・真柳誠「岡田篁所と清末の日中医学交流資料」([http://www.hum.ibaraki.ac.jp/](http://www.hum.ibaraki.ac.jp/mayanagi/paper01/okada.html)

[mayanagi/paper01/okada.html](http://www.hum.ibaraki.ac.jp/mayanagi/paper01/okada.html))

鈴木洋『漢方のくすりの事典』、(医歯薬出版株式会社 1994)

『日本薬局方 完 附分量表』、(日進堂出版 1886)